
Catch up with...

deep

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a t c h u p w i t h . . .

【Nコード】

N 3 3 1 0 F

【作者名】

d e e p

【あらすじ】

式神使いとしての修行を終えた俺であったが肝心の式神が俺になつかなかった。それから三年が過ぎ大学生になった俺の元に一通の手紙が寄せられた。

一通の手紙（前書き）

お楽しみ下さい。

一通の手紙

「はえ？」

我ながら情けない声だとは思う。

しかしそれもしようがないと思わせるほどにその申し出は唐突だった。

「信じがたい話ではあるけど事実なのよ」

我が母親ながら若さを保つその女性は腕組みをしながら答えた。

「今更そんなこと言われても、どうすんだよ」

何とか我に返って言葉を紡ぐとため息混じりに言葉を返してきた。

「せっかくなんだし利用すればいいんじゃないの？」

「利用たってまだどんな式神か分かんねえんだぜ？」

「これ逃したらもう先はないと思うけどねえ」

「もっとマシな答えを寄越せっ」

やってられるかとも言いたげなどうでもいい態度をとって更に続けてくる。

「まああんたの霊力じゃそんなに大きなものは従えられないわけだし」

「だから何だよ」

「最悪契約を結んだ後でも私で処理できるじゃない」

「エルにやらせるってのか？」

「式神の元来の意義は戦いの中にあるもんでしょ？」

「あのエルが望んでるとは考えられねえけど」

「生まれる更に前からその魂に刻まれた衝動は消えるわけではない」

「例に漏れないってか？」

「まあ全部仮の話じゃない。そう深刻になんなくてもいいって」

「軽いなあ。相変わらず」

「ポジティブと言いなさい」

無駄だ。

これ以上我が母親と張り合ったところで結果は見えている。

丁度買物に出ているエルがいれば少しは違った展開を望めたのか
もしれないが。

ないものはないしいないものはいない。

せっかく式神を用意してくれたんだ。これに乗らない手はない。

時期がおかしいとかなんで俺に声がかかったとかそんなことは不問
にしておこう。

「切符は予約しておいてあげるから明日にでも行ってきなさい」

「はなっから行かす気だったろ」

「はっは」

つとにこの親は。

式神とは

俗に言う式神とはこの世を構成する有り難い神のことだ。

キリストやマリア様とはその最たるもので、式神界と称するそこにも縦社会がある。

例えば我が母が契約しているエルは精霊と呼ばれるものでそこそこランクが高い。

もちろん上に位置する式神ほど魔力が高く、成し得る範囲も非常に広く有用性がある。

反面、

どういうわけか人間に懐きにくいという厄介な特性がある。

エルは森の精霊であったが、あれは例外だとしかしいようがない。いつもポワポワしていて疑うことを知らないような純粋な式神だ。

契約があの人でよかったなあと思折ることがある。

そして、俺達式神使いとは俗に言う何でも屋ってやつだな。

同業者はみな多目的処理とか言ってるけど言い方を複雑にしたところで業種が変わるわけじゃない。

式神使いには試験がもうけられており、それをパスしないことには資格はおらない。

悪用する連中は省かれるようになってるらしい。多分最後に手を翳した光の球のことだと思う。

まあでも資格を持ってないからって式神を従えないってわけでもない。

ただ資格も無しに式神を従えているところを政府機関にバレると式神を無条件に消滅させられてしまう。

式神と契約を結べば資格と同じくして政府へ届け、名簿記入が必要

だ。

管理されるのはカチンとくるが、世界の安寧を持ち出されてはこちらも強く出れない。

「しかし今更だよなあ」

資格は持っているながらも契約する式神がいなかった俺の元に届いた実家からの吉報。

母さんの母さん、ばっちゃんはかなり有名な式神使いで名が知れわたっている。

そんなばっちゃんから呼び出しをくらうのはこれが初めてってわけじゃないけど、

何やら切羽詰まっているらしい、とのこと。

なにやら不穏な空気が漂っているが、無視するわけにもいかない。

『次は奥森く、奥森く、左側のドアが開きます。忘れ物のないようお気をつけください』

駅名の通り深い森しか視界に入らないこの閉鎖っぷり。

歳を取るごとに魔力がたぎるあのばっちゃんはこの森に囲まれた屋敷にいる。

「式神、か」

はてさて何が待っているのやら。

老婆の陰謀

「よく来たな」

「遠いところから来てやってんだ。茶菓子でも出せ」

「相も変わらすの無礼者め。少しは弁えることを覚えたかと思えば」

「言っても無駄だ。時間を無駄にするより用件を切り出したほうが早いであろう」

「わかっとる」

いかにも武人な雰囲気を見せるのは、剣において右に出るものなしと謳われるシンゲン。

日本古来の神としてとある村に崇められていた神を引きずり出してきたらしい。

契約の際にはなにやらとんでもないことがあったらしいが詳しくは知らない。

シンゲンはまるでエルとは対局を為すような性格をしている。

疑わしきは罰せよ。

そんな信条を持っており僅かな嘘も綻びもシンゲンの前では無意味。

備え持つ愛刀で一刀で斬り伏せられる。

「話というのは他でもない。実は式神を一つ上から賜ってな」
「上？」

「浮管からな。なんでも向こうじゃ手に負えん言うて泣きついてきおった」

浮管とは浮遊式神管理委員会の俗称のことだ。

簡単に言えば手に負えない式神を管理するバチ当たりな部署だ。

元来なら神たる式神を管理するなど不可能な話であるが、あそこに収容される式神のほとんどは精神を犯しているか、何か目的がある式神だけだ。

あの部署は他には他言できない特殊な方法や手段を持っているらしく、

式神を無条件に従える術があるらしい。

しかし倫理の問題から神に従属させるなど言語同断。

結局のところ力を持って余した人間の咎が集約する場所でもある。

従えられぬ神は無い。

そんな触れ込みを持つ彼らではあるが現実ではまったくのガセである。

中にはその独自の手法をもっとしても扱いきれない式神は存在しているわけであり、

公にその事実が広まってしまわぬように多額の報酬たる口封じと共に高名な式神使いに扱いを押し付けてくるのだ。

ばっちゃんも今回が初めてではなく、何度か預かっていたことがある。

契約を結ぶことはせず、あくまでも式神として扱わねばならず、目下悩みの種になっているらしい。

「向こうで手に負えん神を契約もなしに従えるなどとの道理が既におかしいっ」

「ごもっとも」

「過去の履歴があるからそうなる」

「・・・もしやその式神を俺にあてがう気じゃないだろうな」

「話を追えばそれ以外の選択肢はないじゃろ」

「ちょっと待てよばっちゃんっ、そんなもんとオレが契約を結べばどうなるかわかんだらっ」

「式神の魔力は主に比例することを忘れたわけじゃあるまい」

「その式神自体の魔力は？」

「はつきり言って異常じゃ」

「は？」

「本気で暴ればこの星を征服することも夢じゃないじゃろ」

「なんだそのハザードは！」

「かなり高位の神じゃ。姿こそああじゃがな。なんでも約束とやらがあるらしい」

「約束？」

「ああ。それを果たすまでは暴れんから安心せいじゃと」

「ならなんで浮管の手に負えないんだよ」

「あそこの待遇は世辞にもいいとは言えんからな。気持ちはいくらなんでもない」

「それって爆弾抱えることに向こうが嫌気さしただけじゃんっ」

「言葉を変えればな」

「だからって俺に話が来るのはおかしい流れだろっ」

「すまん。ワシが有名すぎるせいでブランドが荷勝ちしたらしい」

「そのブランドが式神使いでありながら式神の一つもロクに従えない出来損ないを覆い隠してしまったのだ、と」

「その通り」

「くたばればばあ」

長い会話を得てやっと話の全貌を掴んだ。
ような体のいい使いっ走りかよ。

「お前の未熟な魔力もここにきて役に立った」

「まだ受けるとは言ってねえだろ」

「ほう？」

「何だよ」

「シンゲン」

主に名前を呼ばれたシンゲンはゆっくりと刀に手をかける。

「きよ、恐喝する気かよ」

「最近なまっっていると愛理から聞いておるからの。少し鍛えてやろうというだけじゃ」

「き、汚ねえぞ！選択支のない問いかけを世間じゃ恐喝とそう呼ぶんだっ」

「シンゲン」

「わあったよ！やるよ！やりやいいんだろ！」

邂逅

紛いの黒き森たる異名を冠するこの森が下手をすれば墓場となる。さまよった挙げ句出口が見つからないという鬼のような森だ。

地主であり管理をしているはずのばっちゃんも深くは入りたがらないらしい。

風の噂では遺体がそこいらに転がっているなんてものも出回っている。

噂と言いつつ切ればいいがどこか現実めいているようで恐ろしい。

ばっちゃんの話によれば式神はこの森のどこかにいるということ。一月かかっても全てを搜索しきれないこの森のどこを探せばいいのか。

「勘に頼れ」

俺がもしキレ症の男だったなら間違はなく明日の朝刊の一面を飾ったに違いない。

しかし、

あの言葉があながち嘘でもないのかもしれないと先ほどから思い始めたのだ。

というのも奇妙な感覚に陥り始めたからだ。

まるで何かに引っぱ張られているような、そんな感じを受けている。

俺はただ逆らうことなくその感じに従って足を進めているだけなのだ。

霊力とも魔力とも違うこの感じ。しっくりくる言葉といえば、そう。

魂が引っぱ張られているような、そんな言葉がしっくりくる。

もちろん今までそんな経験はなかったし、伝え聞いた覚えもない。

ただ本能的に体が覚えているのだ。これは魂が引っ張られているのだと主張するのだ。

人は本能的に知っていることに頓着を感じることはない。

相手はただの式神ではなく、この世を征服することは容易いことに入ってしまうハザードだ。

確信に似た推測がかま首をもたげる。

俺を呼んでいるのだ。

前方を塞ぐように小枝が密生していた。

それを払うと一気に光が差し込んできた。

薄暗いところを歩いてきた俺に直射日光をあてられても反応できりはずがなかった。

あまりの眩しさに目を覆い、光に順応できるまでしばらくの時間を要することになった。

段々と眩しさも薄れ、手で覆わずとも眩しさを感じないようになってきた。

肉眼であたりを確認するとそこは開けた場所になっており、

遠くにはなだらかに続く尾根道が見え、傍にはどこまでも続く草原が広がっていた。

その脇をかためるように二本の清流が流れ、一つの完成された自然が集約されていた。

「遅い」

聞こえた声はよく通る澄んだ声であった。

遠くに見えるあの小さな姿。

小さいながらも、確かにそれが式神だと分かるものだった。

見るもの全てを圧倒するような威圧感がここまで届いているからだ。

遠くにいる分を差し引いても小柄な体型だ。おそらく俺の首ぐらいの身長だろう。

獣神特有の耳があり、柔らかそうな尾が静かに風に揺られていた。

狐の式神か。

式神は元来それぞれの原型を留めるのだが、高位な神は姿を人に近づける。

エルもシンゲンもそうだが、契約を結んだ時点で自らは神ではなく、契約したその主と対等であらねばならないとの忠義の証でもあるらしいのだ。

「式神、か」

「臆するな。こちらに来やれ」

言葉遣いからかなり古い式神のようだ。

体を纏う着物は白を基調としたものであり、袖口に赤い色がのぞいている。

着物というよりは装束と形容するほうがしっくりくるかもしれない。

漆黒の長い髪は足元まで届こうかという長さであり、

整いすぎた顔立ちは冷徹と称するに些かの躊躇も感じられない。

竦む足を奮い立たせ、一步一步と式神に近づいてゆく。

そんな俺の姿を何をするでもなく、式神はじつと俺を見ていた。

間に人一人分ぐらいの間隔をあけ、対峙すると改めて感じる。

これは俺の手におえるような神では、ない。

「久方ぶりだな」

「・・・？」

「そうであろうな。まあ良い」

「俺を知っているのか？」

「まあ、の」

「狐の式神、なんだよな」

「ああ」

「女、か」

「男のほうがよかったか？」

「いや、そういうんじゃない」

「こちらの体の方が動きやすいのでな。柔軟性があるほうが好みだ」

そう言うと式神は手を差し出した。

「？」

「お前は覚えていないであろうが、俺はお前を覚えている」

「・・・」

「ここに再会の証を示したいのだ。大きくなったな」

何故か、緊張が薄れた。

契約の狐

「連れ戻したか」

式神を連れて帰るとばっちゃんはさも当然と言わんばかりに言った。式神澄ました顔で瞳を閉じ、何をするでもなく静かに鎮座している。しかしながらその姿を凝視するシンゲンはいつもとは少し違っていた。しばらく沈黙が続いていたが、シンゲンの視線に居心地を悪くしたのか式神が言い放った。

「そう敵意を向けてくれるな。暴れ出そうとする気などない」

「かような配慮は持っていない」

「ならばただの畏れか？」

「貴様」

「止めい。お前も何を熱くなっておるのだ情けない」

「しかし」

「シンゲン、お前少し席を外しておれ。必要なら呼び寄せるでな」

「本気で言ってるのか？」

「戯れ言を信じるお前ではあるまい？」

不承ながらも仕方なしと言わんばかりにシンゲンが姿を消した。

「失礼を致しましたな。何分かような気性でありますれば」

「構わん。忠義は酷視するものではない」

ば、

ばっちゃんが敬語使いやがったっ。

人に頭下げるのを何より嫌がるばっちゃんが式神に敬語をつ。

こいつは大事になるやもしれんと今更ながらに感じとった。

「ソレはお目当てのもので？」

「ああ」

「しかしかような愚物に許すとはまたどういう風の吹き回しで」

「愚物とて観るものによれば姿を変えるものであろう？」

「どのように見えていらっしゃるのか」

「俺にしかわからぬ。詮索は野暮というもの」

「なるほど確かに」

「にしても翔孔が全く開いておらぬではないか。何故だ」

「お見通しのままと言いまか」

「力そのものは問題ではない。結局はそれを使うこやつの問題」

「恐れながら、悪用は無いでしょうが持て余すことは充分考えられましたので」

「フンッ。阿呆かと思うほどの慎重ぶりは半世紀経とうとも変わらぬのか」

「それに身を助けられますれば、な」

「まあ良い」

そこで会話を打ち切り、ばっちゃんは俺に向き直った。

「それで契約はまだ済ませておらぬのか」

「会ったばかりの得体の知れない式神といきなり契約なんて結べるか」

「まあ、の」

「先んじて行うこともあるまい。まずは互いの波長も知らねばならぬのは違いではない」

「扱いに困りますぞ？これには」

「知っておる」

「ってかさつきから聞いてりゃばっちゃんは古い知り合いみてえじやんっ」

「よく知っておる」

「それじゃ浮管から押し付けられたとか話が会わねえだろ」

「いきなり話したところでお前の納得も得られまいと思ってな」

さつきから二人とも含みを持たせた言葉ばかり投げかけてくる。
一体何だってんだよ。

「契約どうこうはこの際置いておこう。お前にその気があるかないか、それはどうじゃ」

「式神と契約したいとは常々思ってた。それは嘘じゃない」

「いきなり契約にこじつけるのには不満が残ると、そうじゃな？」

「ああ」

「ならば、取る道は一つだと思うが？」

「ってなわけでこれから居候になる式神だ」

「可愛い式神さんね」

「その形容は好みではないな」

「いいじゃありませんか。ねえエル」

「ええとつても」

エルはニコニコ顔のまま近づくとそつと頭を撫でた。

エルは俺より頭一つ分背が高い。その為こいつと並ぶとさながら親子に見える。

「っ、気安く俺に触るなっ。それとなるたけお前は俺に近づかないようにしろっ」

「女の子はオレ、なんて言っちゃダメなんですよ？」

シンゲンのことがあった手前ひよつとするとエルとも相性が悪いのかと思っていたのだが、杞憂に終わった。

「なあ、母さんもあの式神のこと知ってたのか？」

「まあね」

「なんでそれ俺に黙ってたんだよ」

「その疑問には既にお婆様が答えてくれたんじゃないの？」

「理解できなかったから聞いてんだよ」

「答えを急がないことね。これから一緒にいる時間を通して知っていくしかないんだから」

「・・・」

「大丈夫よ。どうせ逃げられやしないわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3310f/>

Catch up with...

2010年10月9日05時07分発行